

「クリスマス おめでとう」

2016年12月24日

クリスマス おめでとうございます。今年も喜びをもってクリスマスを迎える。私は1959年のクリスマスに洗礼を受けたので、58回目のクリスマスになる。あの年のクリスマスが私の人生の出発であった。生きる意味と目的を失い、悶々としていたが、聖書の告げる全能の神の下にある自分を信じる時、どんなに小さくとも、私のアイデンティティを確保することができる。また、神を証した主イエスは、人の思いを超える愛を貫かれた。神の全能を信じ、主イエスの愛を信じれば、生きることができると思った。喜びと希望が与えられ、この福音を伝える牧師になろうと決心し、洗礼を受けた。暗闇の中で、光を見出したのが私のクリスマスであった。あの日の一途な思いで、今日まで生きてきたが、神は私の願いを顧みて、牧師として宣教の一端に加えてくださった。ただ、感謝である。

ルカ福音書は、主イエスは人がいる所ではない家畜小屋で生まれ、飼い葉桶に寝かされていたと伝える。主イエスのご降誕は、人として扱われない、野宿していた羊飼いたちに天使から「あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである」と告げられた。更に、天の軍勢が加わり、夜空を焦がして「神に栄光、地に平和」の大讚美を見聞きした。彼らはマリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かされた乳飲み子イエスを探し当て、最初のクリスマス（キリスト礼拝）を捧げた。暗黒に捨て置かれた羊飼いたちが、誰よりも先にクリスマスの喜びに与ったのである。

ヒトラーに抵抗したため強制収容所に入れられた牧師が、クリスマス・イブに何の飾りもない寒々とした収容所で、飢えと寒さに耐えながら、数人の仲間と輪になって、クリスマスの讚美歌を歌った。その時、絶望的なここに、主イエスのご降誕されているという恵みを知らされたと書いていた。クリスマスは、ヨハネ福音書1章4節、5節bに「言葉（キリスト）の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている」と書かれているように、輝く光に照らされる命に与る喜びである。

マタイ福音書は、主イエスのご降誕の出来事を「インマヌエル（神は我々と共におられる）」と告げている。神を見失った世界は、人はどこから生まれて来たのか分からず、その生は空しい「死」という暗黒に飲み込まれていく。永遠の神は、独り子イエスを地上に遣わし、永遠と時間を結んでくださった。主イエスを信じることによって、私たちは虚無に流されるのではなく、永遠と結びつき、神に根拠を置く者にさせられる。私も、虚無の底から、永遠の神と共におられ、主イエスの愛に包まれていることを知らされ、生きる確かさへと引き上げられた。クリスマスは、この確かさを喜び、感謝するのである。

マタイ福音書は更に、異教の占星術の学者たちが新しい王（メシア）の誕生を知らされ、東方から訪ねて、贈り物を献げ、クリスマスをしたと伝えている。権力に執着するヘロデ大王は、新しい王の誕生を認めることができず、ベツレヘム一帯の2歳以下の幼児を虐殺した。彼は、他を抹殺して生きようとする、力を誇示する人間を象徴する人物である。主イエスは飼い葉桶で生まれ、十字架で命を落とされた弱く、敗北していく生涯を歩まれた。しかしその生涯は、貧しく、病み、苦悩する人間と共にあり、彼らを支え生かす、愛であった。人から奪って生きようとするヘロデの道と、人に仕え与えようとする主イエスの道とがある。ヘロデは滅び去ったが、主イエスは二千年、全世界でクリスマスを祝われている。クリスマスは、主イエスの人に仕え与える愛の道を選び取る思いを深める時である。その道にこそ、神からの命が与えられるからである。